

WE コラボの提言とパレスチナ「子どもの家」の結節点  
－「連携なき、専門家による支援」と「専門家なき、連携による支援」－

加瀬 冴子

(東京外国語大学 外国語学部 南・西アジア課程 アラビア語科 3年)

2010年3月16日

今回、パレスチナ子供のキャンペーンのスタッフに加わって、地元 NGO（つまりパレスチナ人による NGO）である「子供の家」と共に働いているうちに、お父さんが著書で主張している「WE コラボ」に関する面白い発見があったので、報告します。結果から言ってしまうと、日本における障害者支援の問題が「連携なき、専門家による支援」とすると、レバノンのパレスチナ難民キャンプで同 NGO がやっていることは、問題を抱える子供たちとその周囲に対する「専門家なき、連携による支援」だということです。以下、第一にキャンプの抱える問題を提示し、第二に「子供の家」の概要及びシステム、第三にその問題点、最後に結論に代えてパレスチナ子供のキャンペーンの役割及び今回キャンペーンが子供の家を訪ねた目的、を述べたいと思います。

「連携なき、専門家による支援」と「専門家なき、連携による支援」、とは実には的確な表現ですね。今後、ぜひ、使わせてください。

さて、その上で、私たちは、それぞれの国の実際の事情を踏まえて、次のステップとして何を目指すのがベターなのか、という立論が必要だと考えます。いきなり「十二分な専門家のサポートを伴う、連携による支援」をレバノンで次の目標にすることは困難でしょう。また、「連携なき、専門家による支援」と「専門家なき、連携による支援」という捉え方を二項対立的に捉えて「どちらが望ましいか？」とする立論も、結構陥りやすい穴です。どちらが良いか？などはさして意味がありません。問題は、「今、ここにある危機」をどうすればベターに解決できるか、ということがまずあって、そのうえで、こうした問題の発生構造に迫る思考が求められるからです。

## 1、難民キャンプの子供たち

レバノンには東西南北各地に難民キャンプが点在しており、その殆どがスラム街のような様相を呈しています。中には、ほとんど周囲の街との差がなく一見キャンプとわからないようなところもありますが、一方、レバノン軍とパレスチナレジスタンスの抗争で破壊された、といった理由で瓦礫と化しているキャンプもあります。そして多かれ少なかれどのキャンプも破壊と虐殺を経験しています。したがって数多くの子供たちが、非常にショッキングな光景を見たり、耐えがたい経験をしているわけです。このような状況で、子どもたちの中にはトラウマを抱えていたり、PTSD である子がいます。あるいは鬱状態だったり、ハイパーアクティブであったりする子もいます。あるいは学校の勉強（国連が運営する学校のこと）についていけない子供たちがいます。「特別な支援」が必要な子どもたちなどです。そして一番の問題は、小学校の段階で学校をドロップアウトしてしまう子供たちです。理由は様々ですが、主に家庭内の問題、あるいは学校側の問題が理由です。家庭内の問題としてはたとえば、経済的に厳しい家庭では、親が子どもに学校をやめさせて働かせる場合があります。あるいは夏休みだけ働かせたら、子どもが学校に通うのを辞めたというパターンもあります。また、両親のどちらかが身体あるいは精神疾患であって子ども

が学校どころではない、父親が職を持たず<sup>1</sup>、結果暴力的で子供を虐待している、などキャンプの鬱屈した状況が家庭内に問題を生み、子どもに影響している場合もあります。これは前述した子供たちの精神疾患の原因の一部でもあります。学校側の問題というのは、国連の学校がカリキュラム重視、結果重視なことにあります。つまり、子どもたちの問題に目を向けないために、授業についていけない子たちが放置され、その子どもたちが学校に通わなくなるという問題です。また国連サイドは否定していますが、子どもの家の調査によれば、日常的な体罰が学校に存在しており、それが子どもたちのドロップアウトの一因となっています。

なるほど……。 「沈黙を破る」？ でしたっけ、あの映像を思い起こしながら、レバノンの現実をできるだけ想像してみました。実際にリアリティをもってイメージすることは難しいけれど、子どもたちが「本人が持っている問題～With Difficulties」ではなく、「本人が抱え込まされている問題～In Difficulties」状況に置かれていることはよくわかります。前者の「With」的見方は障害児や問題行動を示す青少年に対する伝統的な「診断的見方」で、後者の「In」的見方は今こそ求められている「リレーショナルな困難観」です。いわば「夜回り先生（わかる？）」的視点といってもよいでしょう。

スウェーデンは移民を積極的に受け入れているため、学校は「多言語・多文化学校」になっています。前回の訪問時に出会ったボスニア出身の高校生、アドヌン君を思い出しました。彼の小さいときの記憶はお爺ちゃんにおんぶされて、外にでること。楽しい思い出だったのですが、後にボスニア戦争の銃撃から逃げる際の記憶だったことがわかります。やがて祖父と母と3人でスウェーデン南の玄関口マルモ市に移民。でもスウェーデン語も英語もできず、移民のための「言葉の準備学級」に入ります。スウェーデン語がある程度できるようになると通常学級に移りましたが、やはりいじめにあい、下肢マヒもあり、高校は是非とも自分のような学生を丁寧に受け入れてくれるところに行きたい、ということでパパが今きている Kristianstad 市にある「国立肢体不自由児高校」にマルモから毎日200キロを福祉タクシーで通っていました。なぜ、毎日400キロを往復するか？ 素敵な学生寮もあるけれど、母には港湾・大都市のマルモでないと仕事がない、でも家族で暮らしたい、だから福祉タクシーで毎日通うのでした。

## 2、「子供の家」

「子供の家」、正式名称 the national institution of social care and vocational training は、このような子供たちとその家族に対応している地元 NGO です。その事業の柱は、以下の通りです。

---

<sup>1</sup> レバノン国内のパレスチナ人は70種の職種制限があり、職に就くのは非常に難しい。その多くはブルーカラーの仕事をしている。

- ①小学校1年生から4年生までの子供たちに対する補修クラスの運営
- ②中学校を卒業した子供たちへの職業訓練コースの運営
- ③問題を抱える子供たちと家族に対するケア
- ④パレスチナ刺繍の販売

#### ① 補修クラス

英語、アラビア語、算数の補修クラスが週五日、子どもたちのために開かれています。学校の授業についていけない子供たちに補修を行うことでドロップアウトさせないようにしようというものです。また国連の学校では、音楽や技術家庭のような授業がないため、週末にはこれらを扱うレクリエーションのクラスがあります。1つのクラスにつき生徒は5名から20名で、先生は1名。先生は全てパレスチナ人で、主に大学まで卒業した、あるいは大学在学中の、20代から30代のひとたちが担当しています。教育関係の専門家ではありません。

#### ②職業訓練コース

70種の職種制限があるという現実に対応するために運営されている、パレスチナ人の若者に対するコース。今回はほとんど立ち入ってないので報告は避けます。

#### ③ケアマネジメント

子供たちや母親に対するケア。現地ソーシャルワーカーとレバノン人の臨床心理士が中心となって、補修クラスの先生たちと協力しながら子供たちやその家庭が抱えている問題に対応しています。そうすることで、子どもたちが学校を続けられるような環境を作るといった目的の下に行われています。またそれが家庭全体のケアにもつながっています。ソーシャルワーカーの人たちは全員パレスチナ人です。そして臨床心理士のほとんどはレバノン人で修士課程あるいは博士課程を修了した人たち、いわゆる専門家ですが、その数は足りているとは言えません。

#### ④パレスチナ刺繍の販売

子供の家の財源の一つであるとともに、パレスチナの存在を世界中に広める、またパレスチナ人のお母さんたちに対して職業を提供する、という意味合いがあります。パレスチナ子供のキャンペーンでも輸入販売を行っています。

以上が子供の家の事業の概要です。そして今回の訪問で実感したことは、①と③に関して、教師・臨床心理士・ソーシャルワーカー・家族の連携、信頼関係がとてうまく作られているということです。現場に必要なことを知り、必要なことを行おうとしています。そう実感した理由については、後に述べます。

先日、訪問した小中学校併設校は、上述したように多言語・多文化学校で、最高30言語が飛び交うそうです。ここにはスウェーデン語がまったくできない生徒のための「言葉の準備学級」やスウェーデン語が第二外国語という生徒のための「第二外国語学級」、障害や精神的ストレスのきつい子どものための「特別指導グループ」などがあり、基礎教科（スウェーデン語、算数、英語）の学力保障と良好な人間関係を保障しようとしています。スウェーデンの学校はクラス担任、教科担任ではなく「Arbetslag」といって複数の教員チームが、クラスの運営に責任をもちます。たとえばアラビア語等々の言語がネイティブにできて、かつスウェーデンの大学で算数教師の資格をとった先生、国語の先生、余暇指導員、心理士、ソーシャルワーカー等々がチームを組むわけです。その意味では、「多様な専門家による、連携による支援」が実現できているといえるでしょう。レバノンも「連携による支援」はかなり機能しているが、十分な「多様な専門家」が不足しているということですね。

### 3、NGOが抱える問題

問題点としては、やはり専門家が少ないために、対応しきれない深刻なケースが出てくるということです。たとえば、北部のバダウィというキャンプにアフマドという2年生の男の子がいました。彼はキャンプの破壊を経験していて、心に問題があるという話でした。時々、何らかの理由で卒倒してしまうことがあるそうです。また、補修クラスでも、「文章を読む」ということに困難を感じている様子でした。しかし、このNGOのスタッフのほとんどが障害児教育やケアの専門家ではなく、また彼だけについていられる専門家もいません。このように、需要と供給が追いつかないというのが、このNGOの問題点の一つです。それからもうひとつが、「記録」の問題です。「WEコラボ」の中で、様々なプロファイリングの方法が提示されていましたが、そのような記録の蓄積があまり行われていません。ケーススタディもあまり定着していないのが実態です。そして、このような問題に対する支援を行っているのが、「パレスチナ子供のキャンペーン」です。

なるほど。アフマド君のようなケースは日本でも散見されます。むごい経験をしている場合に、その記憶が突然よみがえることがあります（フラッシュバック）、その苦痛から逃れる手立てとして、本人も意識していないのに「卒倒」することで回避する、という構造です。中には、あえて「多重人格」になって、つらい記憶がよみがえりそうになると、「別の人格」に切り替えるという高度な技を使える高機能広汎性発達障害の人もあります。

受容と供給の問題は、政治と原資（お金）の問題が根底にあり、難しいですね。「記録」の問題も、実は「なぜ、記録を行うことに意味があるか」という政策誘導と、「記録」をするための物理的な資源（紙とファイルなど）の恒常的確保、および「記録する人への報酬」という財政問題抜きには語れないというのが現実です。となると、「パレスチナ子供のキャンペーン」が、こうした構造的な問題にどう迫っているか、に非常に興味がわきますね。

#### 4、結論に代えて

パレスチナ子供のキャンペーンでは、年に1、2回、必要に応じてパレスチナ難民キャンプを訪問しています。その目的は、「子供の家」をよりよくするための客観的調査と専門家派遣による研修です。たとえば今回は、補修クラスに対するアセスメントを子供たちと母親たち他に行いました。また立教大学心理学部教授である箕口雅博先生と現地のレバノン人臨床心理士とともに、補修クラスの先生とソーシャルワーカーに対する研修を行いました。研修の内容は、子どもたちのストレスをどのように軽減するか、相手の心をいかに理解するか、またスタッフ自身のストレスを軽減するためのセルフケアの方法、ケーススタディ、プロファイリングの方法、などです。スタッフ自身のリラクゼーションが研修に含まれているのは、このNGOの特徴として、例えばスタッフ自身が問題を抱えている場合があるかもしれないからです。スタッフもキャンプの住民であり、多くの大人は破壊や虐殺の被害を受けた経験があるためです。

「子どもの家」の実践に対する支援としては、実面的を得ているものと思います。とりわけ、スタッフへのセルフケアの方法はとても大切。国際的にみて、厳しい仕事をしている人たちのバーンアウト（燃え尽き症候群）対策は極めて重要で、「ケアする人の心のケア」は世界最先端の課題です。

今回私はこの訪問に通訳兼何でもや、という感じで参加したわけですが、そこで実感したことは、前述の通りスタッフ同士の連携と信頼関係の強さ、対応している各家庭からの信頼の強さでした。それはアセスメントの結果の多くが良好であることや、お母さんたちからスタッフに対する感謝の言葉が多く出ることや、研修中の先生とソーシャルワーカーの協力具合から容易に判断できました。問題は、このせっかくの「連携」が構造化されていないために、不安定であるということです。キャンペーンもプロファイリングなどを通じた情報の共有などの方法を推薦しこの連携をより安定したものにしようとしています。またアセスメントを現地スタッフが行えるようにすることで、よりスムーズで綿密な運営ができるようにしようとしています。私が「WEコラボ」が役立つかもしれないと感じたのはこの点です。「WEコラボ」のなかで説明されている、例えば「7人の侍」のような構造化されている連携や、各自治体の障害児ケアに対する体制の成功例が、この「子供の家」に活かせるのではないか？と思ったわけです。もちろん、状況は非常に異なっており、専門家の視点からみたらそんなに簡単なことではないかもしれませんが、私の実感として、「WEコラボ」で研究されていることと「子供の家」の実践していることに、少なからずつながりを感じた、というわけです。以上で報告を終わります。

<せっかくの「連携」が構造化されていないために、不安定であるということです。>という把握は極めて重要で、パパの認識とまったく一致します。日本でも、スウェーデンでも、レバノンでも、<子ども中心>に考えて行動を起こしている人たちはたくさんいます。それが、たまたま構造化されている<かのように見える状況>だと、実に事態はスムーズに進展する、が実は「構造化」されているように見えたのは、一部の「スーパーマン」のような人が牽引していたから、という状況が圧倒的に多い。レバノンとの関係でいえば、「パレスチナ子どものキャンペーン」が踏ん張っているから「専門家なき（不足している）」状況だけれども、「連携による支援」が継続しているのかもしれませんが。しかしキャンペーンができるだけ手を引いたほうが良いと理屈では思ってもそうはいかない現実がある、というジレンマに遭遇しているというのが現状でしょう。キャンペーンの活動とレバノンの改善をいったいどうすれば「構造化」できるのか、というタフな課題に行き着きます。

このジレンマをどうすればよいか。パパの今のテーマですが、答えは見つかっていません。ただ、ジレンマというのは解決できるものではなく、その時、その場所、その国で、「どのように向かい合うか」と考え、共有しあい、立ち向かい続ける（しかない）ものではないかと考えるようになりました。ここ、スウェーデンが素晴らしいと思うのは、「解決できている」からではなく、「常に、オープンに、立ち向かい続けている」という点です。WEコラボの本、全体を通じて伝えたかったことは、技術というよりも、「話し合い、考えあい、チャレンジし続けましょう」というメッセージでした。

さて、今回のレポートへの書き込みは以上です。非常に優れたレポートで書き込みがありました。これが小さい頃、散歩に出かけては、それぞれの公園すべての滑り台に立ち寄り、「おとーさーんっ、見ててー！」と滑って見せてくれていた冴子のレポートか！！と驚愕しています（母、涼子はたぶん<あーっ、親ばか丸出し！って笑うね）。

スウェーデンに来ると、冴子を含め家族の紹介をすることが多いのですが、「アラビア語と英語ができて、パレスチナ問題をやっているなら、Saeko をぜひスウェーデンに連れてきて！」と皆から言われます。4年生になると忙しいかな？来年の5月、スウェーデンが最高に美しい時期に家族でくるといえるのはどうでしょうか！？

レポート評価=S (Aのさらに上)

20100321

加瀬 進

(東京学芸大学特別支援科学講座)